札幌大学総合論叢　第15号（2003年3月）

〈研究ノート〉

「船連」姓者が残した足跡についての考察

泉　　敬史

はじめに

日本が「倭」と呼ばれていた時期からの二千年以上にわたる日中交流の歴史を見ていくと，当然ながら時代区分ごとの特色や傾向を見出すことができる。また，それぞれの時代区分にあって，日中両国がおかれていたさまざまな状況が，その時代の日中交流や，それを記述した史料上の記録に反映されており，そのおかげで今日のわれわれが，日中関係の考察を通してそれぞれの国が直面していたさまざまな事情に触れることができる。中でも日本の奈良朝廷と中国唐朝の間に繰り広げられた交流は，長い日中関係の歴史の中でも，まさに交流の最盛期であった。最盛期がある以上，そこに向かう興隆期と，それが鎮静していく衰退期が前後に見られるわけで，このような移り変わりの時期におきているさまざまな事象を，それがもたらした結果と併せて考察することによって，国家間交流を考える上でのいくつもの注目すべき歴史的事実と出会うことになる。本稿ではいずれも日本仏教界の巨人ともいえる道昭・行基・鑑真と，この三者が残した大きな足跡に共通して係わってくる「船連（ふねのむらじ）」という氏族に注目し，この「船」という氏を出自とした人物たちの，最盛期日中交流への係わり方を追うことによって，当時の日本知識者階層が，かなりの情熱を持って取り組んだ中国との交流活動の周辺に見られる歴史的断面について考えてみたいと思う。「船連」を含む「王辰爾（おうしんに）」の一族については，井上光貞氏や関晃氏の優れた論考があり，ここではそれを繰り返す愚は避けて，歴史的流れの中に見られるいくつかの共通項を挙げながら稿を進めていきたい。

船氏について

船氏の名前は『日本書紀』や『続日本紀』にわりと頻繁に見ることができる。そのいくつかを取り上げると，日本書紀欽明天皇十四年七月紀に，「船史（ふねのふびと）」と「船連」という「姓」が登場する。

秋七月辛酉朔甲子，幸樟匂宮。蘇我大臣稲目宿禰，奉勅遣王辰爾，数録船賦。即以王辰爾為船長。因賜姓為船史。今船連之先也。

王辰爾というのは百済系の渡来人の血筋で，その詳細は『続紀』延暦九年七月の条に書かれている。この「王」という渡来系の姓が「船史」という新しい姓を賜ったわけである。「辰爾」の記述は敏達元年五月の条にも登場する。

丙辰，天皇，執高麗表疏，授於大臣。召聚諸史，令読解之。是時，諸史，於三日内，皆不能読。爰有船史祖王辰爾，能奉読釈。

高句麗からの国書を他の多くの史（ふびと）が解読できない中で，すでに船史の姓を賜っていたはずの辰爾だけがそれを読み得たという記述である。そもそも「史」とは文筆を司る渡来人系の姓であり，その中で辰爾が特に優れていたことがここに示されている。

道昭とその父の出自

船史の記述は皇極四年の中大兄によるクーデターの場面にも登場する。皇極天皇四年六月紀に見られる船史恵尺（えさか）に関する以下の記載がそれである。

己酉，蘇我臣蝦夷等臨誅，悉焼天皇記・国記・珍宝。船史恵尺，即疾取所焼国記，而奉献中大兄。

蘇我稲目の抜擢により船姓を賜った辰爾の，年齢的には息子あるいは孫とも考えられる血筋が，ここでは蘇我氏を倒して新しい勢力となっていく中大兄のために手柄を立てている。中大兄とともにこのクーデターを主導して，後の藤原氏繁栄の基礎となった中臣鎌足との関係もこのあたりが契機となったことであろう。そしてこの恵尺が，のちの入唐学問僧で大僧都にも補任された道昭とつながっていく。文武天皇四年三月紀の以下の記述を見てみたい。

三月己未，道照和尚物化。天皇甚悼惜之，遣使吊賻之。和尚河内国丹比郡人也。俗姓船連。父恵釈少錦下。

つまり道昭は恵尺の息子にあたるわけである。ここに引用したのは『続日本紀』文武四年三月の道昭の卒伝の冒頭部分であるが，これは同じ『続紀』に載せられた他の僧の卒伝と

比べて異例に長いものである。また，道昭は白雉四年に学問僧として入唐しているが，その一行に時の内大臣中臣鎌足の長子定恵が加わっている。ここには父恵尺が中大兄の信頼を受け，それを糸口に鎌足と道昭，さらに鎌足の子定恵と道昭が絆を深めていく時の流れが見受けられる。

船史は天武十二年に「連」の姓を賜わる。敏達天皇元年五月紀の以下の記述の通りである。

冬十月乙卯朔己未，三宅吉士・草壁吉士・伯耆造・船史（中略）併十四氏賜姓曰連。

文武四年の道昭の卒伝で，俗姓が「船連」とあるのは，これを受けてのことということになる。

夫子と延慶

船連出身の道昭が逝去して五十四年後に，「船連夫子（ふうし）」という人物が，出家を理由に冠位を辞退するという記述が『続紀』に見られる。天平勝宝六年十一月紀の以下の記述である。

辛未，大唐学問生無位船連夫子授外従五位下。辞而不受。以出家故也。

そしてこの四年後，天平宝字二年八月に，延慶という僧が同じく冠位を辞すという記載が見られる。

辛丑，外従五位下僧延慶，以形異於俗，辞其爵位。詔許之。

「以形異於俗」という辞退の理由は，自分が僧であるからということで，夫子の辞退理由と同じであり，与えられた冠位も同位であることなどから，薗田香融氏は「日本古代の貴族と地方豪族」の中でこのふたりの人物の同一性を推定しておられるが，従うべきと考える。するとこの延慶の俗姓も船史ということになる。

ここで『唐大和上東征伝』の，鑑真和上が大宰府に入る記述の一部に目を移したい。

（天平勝宝五年十二月二六日）延慶師引大和尚入大宰府

このように，鑑真和上に付き添って大宰府に入った延慶法師もまた，船連の血筋であったことになる。

船連と道昭・鑑真

奈良時代の記述を収めた『続日本紀』には道昭，道慈，玄昉，行基，鑑真，道鏡等の伝記が載せられているが，これらはいずれも，この時代の仏教界を語る上で欠くことので

きない人物たちと言えよう。この六人のうちの三人が入唐経験者であり，一人が中国から渡って来た人物である事実は，この時代の日中交流の盛んであったことを改めて認識させてくれる。また，船連との係わりを述べると，まず道昭がその出自であり，入唐の時期は不詳ながら在唐中に鑑真と接触し，僧形となって鑑真に相伴して帰国した延慶も，すでに述べた通り，同じ出自と推定される。道昭は唐で玄奘三蔵に師事した名僧で，法相宗の正統な伝来者と目される七世紀日中交流の功労者であり，数々の困難を乗り越えて現実のものとなった鑑真の来日に延慶が一助を果たしていたとするならば，彼もまた，海外文化の受容をもってさまざまな社会的発展の起動力としてきた日本社会の歩みに，結果として少なからず係わった人物であるとすることができる。加えてもう一人，社会事業を通じて仏教を国家から民衆の身近へと引き下ろし，社会への着床を促した行基の足跡の中に，船連とのかかわりを感じ取ることができるのである。

道昭と行基

道昭は東大寺の僧凝然の手になる『三国仏法伝通縁起』で，法相宗の正統な伝来者と位置づけられている。それによると白雉四年に入唐した道昭は，当時五十一歳だった玄奘三蔵と同宿して法相宗の教えを受け，帰朝後その伝うところを広めたとされている。また同書には，

　　道昭和尚授法於行基菩薩也。

とも記述されており，凝然は行基を道昭の弟子としている。もっとも凝然は鎌倉時代の人で，『三国仏法伝通縁起』の成立も 1311 年とはるかな後世であり，これをもって二人の師弟関係を確定するには無理がある。一方『三代実録』の記載によれば，道昭は帰朝翌年の斉明七年（662）に元興寺の東南隅に禅院を設けており，そして『続日本紀』には，そこで「天下行業之徒，従和尚学禅焉」という記述がある。これは行基生誕（668）の六年ほど前の時期にあたり，『行基菩薩伝』によれば，行基は十五歳（683）で出家し，法興寺，つまり元興寺に住んだとされており，齢五十を越えた（54 歳）道昭と，青年僧行基がここで足跡を重ねた可能性がある。

道昭は禅院に住居を定めた以後に広く世間を歩き始める。そして道の傍らに井戸を掘り，船着場を整備したり橋を架けたりといった社会事業に精を出すが，こういった土木技術は，船連という姓が血筋として伝えていたものとも考えられる。十年以上の天下周遊の時期を経て，おそらく，天武八年（679）十月に出された，僧尼の寺院内居住を定めた勅に関係してのことと思われるが，もとの禅院に帰っている。行基が出家して法興寺に住んだのを

十五歳とすれば，この帰還後の時期にあてはまり，そこで行基は，道昭から法ばかりでない，仏教者が果たすべき社会事業や土木技術についても教えを授かった可能性があるのである。

のちに行基は伝道と結びついた土木事業を展開し，それを通じて民衆パワーを吸引して行基教団ともいえる集団を率いる。そして，そこに育まれた強大な民力が大仏造営の勧進に起用され，護国仏教と民衆仏教が上下合体を果たすことになる。また，ここにおいて朝廷は，かつては迫害を加えた行基を大僧正に補任する（745）。これはある意味では，入唐し仏法を将来する功労と，信仰という力の結集からもたらされる功労に同等の意義を認めたということができる。つまり仏教は，それ自体の力に加えて，それを信仰する人々の力をも帯びることになったわけである。

おわりに

行基の死後四年ほどで鑑真の来日が実現する。彼ら三人は同時代人ではあるが，道昭は鑑真を知らず，行基は鑑真に会わず，鑑真が生まれる二十七年前に道昭は日本への帰国の途に就いている。つまり三者が互いに相見えることはなかったのであるが，そこに船連が残した共通の足跡をたどることはできるのである。欽明天皇十四年に残された辰爾の足跡から，鑑真に従って大宰府入りした延慶の足跡まで，ちょうど二百年の年月がたっている。これはこの時代の日中交流が勢いを加えていき，最盛期を迎える時代と重なる。つまりそれだけ注目すべき歴史の局面や断面が数多く見出せる時期であるといえよう。同時に，そこに見られる船連が残した足跡も，日中交流とそれによってもたらされた社会の趨勢を考察する上での貴重な手がかりとなるはずである。